

# 保育実践へのタブレット PC 導入期の記録

## —「アプリの時間」以外での活用—

阿部 学<sup>1)</sup>

千葉大学大学院人文社会科学部 特別研究員<sup>1)</sup>

本研究では、保育実践へのタブレット PC 導入の可能性について探る。保育実践にタブレット PC を導入しようとする試みとしては、特定のアプリで遊ぶ時間をとる、言わば「アプリの時間」での事例がすでにある。本研究では、そうした発想ではなく、時間的、文脈的に幅のある保育カリキュラムの中でどう活用されるかを探る。具体的には、私立 A 幼稚園で、約 1 年間、5 台の iPad を自由に活用してもらった。その様子を追うと、ゆるやかな試行錯誤の時間、それとない探求の意識、代替物としての使用、道具としての認識、成果優位の発想などがタブレット PC 導入時には重要な観点となりうることを示唆された。

キーワード：タブレット PC、アプリ、保育、道具、文化、A 幼稚園

### 1. はじめに

近年の教育界での話題のひとつに、学校現場でのタブレット PC の導入および活用についての議論がある。この数年のうちに、文部科学省による「学びのイノベーション事業」、総務省による「フィーチャースクール推進事業」、関連業界団体による「デジタル教科書教材協議会」の実証研究など、様々な立場からの取り組みがなされてきた。自治体レベルでは、佐賀県武雄市の取り組みが注目を集めているところである<sup>1)</sup>。もちろん、学校現場で個々に取り組まれる試みもある。

ところで、こうしたタブレット PC に関する議論は、主に小学校以降を舞台としたものである。保育実践の中での活用に関する議論は少ない。保育実践におけるタブレット PC 活用の道を探る可能性はないのだろうか。

### 2. 保育実践での議論の可能性は？

もっとも、幼・保一小的教育のあり方の違い、そもそもの発達段階の違い、さらには日本の保育実践の多様性<sup>2)</sup>といったことを考慮すれば、保育実践にタブレット PC を導入することには慎重にならざるをえない。

おそらく、一般的に、小学校の成功事例を真似て、幼稚園や保育所にも同じようにタブレット PC を導入すれば、即、良いことやおもしろいことが起こるという魔法のような話はあるにないだろう。もし、保育実践でタブレット PC を活用しようと思うのであれば、主に学習活動の改善・創造のためにタブレット PC を活用しよう

という小学校以降での発想に依拠するのではなく、情意や発達段階に留意しながら遊び・生活を中心とした教育を行っていくという保育の特性<sup>3)</sup>に留意することに迫られるはずだ<sup>4)</sup>。

また、そもそも幼児の望ましい発達のためには、タブレット PC などの機器に触れるより、生身の身体をいっぱい使って遊びまわったり、対面での直接的なコミュニケーションをしたりすることの方が望ましいという意見もあるかもしれない。

こうした点について、個々の機器に限らずメディアという概念にまで視野を広げると、たとえば次のような主張がみつかると。小林 (2006) は『メディア時代の子どもと保育』という著書の中で、「本著の主張は、メディア時代といわれる現在、子ども・保護者・保育者に、希薄化する「生の実感」を取り戻そうということです」(p.148) と言いながら、子どもおよび保護者が無自覚的にメディアの影響を受けることを否定的に述べている。この例のように、幼児と新しいメディアとの関係は否定的に捉えられることもある。

ある立場からすると、幼児がメディアに接触することは避けるべきことなのかもしれないが、実際のところは、タブレット PC (およびスマートフォン<sup>5)</sup>) などの新しいメディアは、幼児にとって避けては通れないほど身近なものになっている。ベネッセ教育総合研究所 (2013) が、0 歳 6 か月～6 歳までの乳幼児をもつ母親を対象に行った「乳幼児をもつ親子のメディア活用についての調査」では、「母親がスマートフォンを使用している 2 歳児の 2 割超が、「ほとんど毎日」スマートフォンに接している」という結果が出ている。また、「保護者は、子どもに学習アプリ・ソフトを使わせることに対して、「知

ABE Manabu<sup>1)</sup>: How to Use Tablet PCs in "A" kindergarten

<sup>1)</sup> Post Doctoral Fellow, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University

識が豊かになる (81.5%)」「歌や踊りを楽しめる (77.1%)」「作る、描くなどの表現力を育む (68.7%)」などの可能性を感じている」と、新しいメディアに期待を寄せている結果も出ている。これからますます、幼児はタブレット PC やスマートフォンに触れていくことになるだろう。

なお、少々遠回りになるが、筆者が 2008 年から継続して参与観察をしている A 幼稚園<sup>6</sup>の様子からも、子どもと新しいメディアの身近さが伺える。2008 年頃、すでに子どもたちは図 1 のような携帯電話をつくり、所謂ごっこ遊びを行っていた<sup>7</sup>。園内には、遊びで使ってもらうための黒電話もあったのだが、この時期の子どもたちには見向きもされず、倉庫に眠ることになっていた。当たり前のことかもしれないが、この時期の子どもたちにとっては、黒電話より携帯電話の方がリアリティあるものだったということだろう。さらに、2012 年頃からは、子どもたちは図 2 のようなスマートフォンをつくるようになった。ものの数年であるが、この幼稚園の子どもの世界のトレンドも、大人の世界と同様、フィーチャーフォンからスマートフォンに移り変わった。

もちろん、子どもにとって身近だからといって闇雲にタブレット PC を活用させればよいということではなく、また、多様性があるとされる我が国の保育実践の場に一律にタブレット PC を導入すればよいということでもないが、もし、タブレット PC が子どもにとって無理なく自然に使いこなせる道具なのであれば、活用の仕方によっては、よりよい保育実践を創造するひとつの契機が生まれるのではないかと期待をもつこともできる。

では、具体的に、どのように活用の仕方を探っていけばいいだろうか。



図 1 携帯電話



図 2 スマートフォン

### 3. 保育実践とメディアに関する先行研究

すでに、保育実践におけるメディア活用の仕方についてのまとまった研究はいくつもある(中坪 2005; 堀田 2007)。ただし、先行研究が対象としているのは、テレビ番組、デジタルカメラ、PC および教育ソフトなどである。

タブレット PC には、そうしたメディアとは異なった

特徴もある。タブレット PC 自体に注目し、その活用の仕方を具体的に追っていく必要がある。その際、方法は中坪(2005)にならい、短期的な教育効果を追うのではなく、活用状況を継続的・具体的に追うよう留意しなければならない。そうした先行研究の方法論を参考にしつつ、タブレット PC そのものの活用方法を探ってみよう。

### 4. 「アプリの時間」の先行実践

保育実践の中でタブレット PC を活用している先行実践はある。そのひとつに、幼児向けアプリを開発している株式会社スマートエデュケーション<sup>8</sup>による事例がある。スマートエデュケーションは、同社の開発したアプリがインストールされた iPad を幼稚園や保育所に貸与するという取り組みを行い、各所での活用事例を園長へのインタビューやレポートとしてまとめ、ウェブサイトにて公開している。たとえば、次のような活用方法が挙げられている。

毎朝、徒歩通園とバス通園それぞれの園児が全員揃うまでの時間を、自由な遊びの時間にしているのですが、その時間にスマートエデュケーションのアプリが入った iPad で遊ぶことができます。<sup>9</sup>

5 歳児クラスはおおよそ 1 週間に 1 回、文字の練習などの後に「お楽しみ」の時間として導入しています。集中力を要する活動を行った後の息抜きのような位置づけです。遊ぶ時間は 30 分程度です。<sup>10</sup>

5 歳児(年長さん)クラスの子どもは 16 人で、4 つのグループに分かれ、3 人~5 人で 1 つの机を囲んでいます。/週に一度の“iPad 時間”を前に、園長の三鍋先生が iPad (iPad2 を 3 台、iPad-mini<sup>11</sup>を 1 台)を持って教室に入ってきました。/先生が各机に iPad を置き、先生のお話が終わるまで、行儀よく待つことができています。/まずは、音楽アプリ「おやこでリズムえほんプラス」で遊びます。/1 回目は三鍋先生が「曲」と「レベル」を指定します。今回は「おもちゃのチャチャチャ」<sup>12</sup>の「かんたん」レベルに挑戦! /先生が「みんなで力を合わせて、上手に楽器をひきましょう!」と声をかけると、子ども達は一気に画面に集中。/もう何度か遊んでいることもあるのか、とても慣れた様子です。自分に一番近い楽器を演奏するように、自然と役割分担されていました。<sup>13</sup>

これらの活用方法は、子どもに特定のアプリで遊ばせるという活用方法である。これらの記述の限りでは、iPad で遊べる時間が保育者によって設定されており、

子どもたちはその時間の中で、特定のアプリで遊んでいるようである。本稿では、こうした活用方法を便宜上「アプリの時間」としての活用と呼ぶことにする。

「アプリの時間」での活用事例の積み重ねによって、アプリで遊ばせる際の留意点についての蓄積もなされているようである。たとえば、次のようなことが語られている。

最新のiOSではロック機能がかなり向上しており、子どもたちに触れさせたくない部分を細く指定してロックすることが可能です。アプリを変更したい時は先生に言えば、先生が変更してくれます。園児が勝手にアプリを購入したり、他の機能に触れたりすることは一切できないので、心配なく遊ばせることができるのです。<sup>14</sup>

保育室ではだいたい4人で1台のiPadを使用するので、全員が同時に触ろうとすると大変なことになってしまうのではないかと最初は心配したのですが、実はそうなるとゲーム自体が動かなくなってしまうんですね。敢えて口を出さずに見守っていると、子ども達が自分たちでルールを見つけ、話し合いをしながら順番に操作するようになりました。<sup>15</sup>

このように、「アプリの時間」としての活用事例の報告はすでにあり、各所で「アプリの時間」を有意義なものにするための留意点についての蓄積もなされてきている。ウェブサイトではどちらかといえば良い面の紹介が中心となっており、課題についての詳細な考察も知りたいところではあるが、「アプリの時間」について何かしらの知見の蓄積はあるということは確認できた。

## 5. 問題と方法

さて、タブレットPCの活用の仕方は、「アプリの時間」以外にも考えられるはずだ。タブレットPCには、他のメディアにはない特性がある。モニターを複数人で覗き込みやすい、持ち運びやすい、それでいてネット接続が可能、一台に複数の機能が備わっている、最初から汎用性のあるアプリがプリインストールされている等々。そうしたタブレットPCの特性からすれば、遊び方が決まっている特定の教育アプリの中で遊ぶという使い方だけでなく、様々な使い方ができるはずだ。

また昨今、保育研究においては、子ども個々の関心によりそうことや、長期的に遊びを深めていくこと、状況に応じて環境を整えていくことなどの重要性が語られている(大豆生田2014)。比較的に短時間的で、言わば脱文脈的な「アプリの時間」ではなく、そうした意味で幅のある保育カリキュラムの中では、タブレットPCは

いかに活用されうるだろうか。

以上の考えから、本研究では、「アプリの時間」以外での活用を追うことにする。具体的には、iPad活用経験はないが関心はあるという私立A幼稚園<sup>16</sup>に、iPadを自由に活用してもらおうということを試みる。

A幼稚園は、所謂「自由保育」の理念にもとづく保育を行っており、子どもの実態に応じて、必要があれば新たなメディアを遊びに取り入れている。これまで、ビデオカメラやデジタルカメラなどを必要に応じて子どもたちに使わせてきている。新しいメディアに強い抵抗はないと思われる。そもそも、保育者らはiPad導入にもささやかに興味をもってはいたが、諸々の都合もあり、いざ導入するということには踏み切れていなかったという経緯がある。

A幼稚園には、2013年4月から2014年3月までの約1年間のあいだ、5台のiPad<sup>17</sup>を自由に活用してもらった<sup>18</sup>。この期間を、本研究では「導入期」としたい。この導入期に、「アプリの時間」ではなく、A幼稚園での生活に馴染むよう、無理のない範囲でiPadを使ってもらうことを期待した。A幼稚園には、最初から筆者が使い方を提案するのではなく、「使えると思ったときに、好きなように使ってほしい」、「必要がなければ使わなくても構わない」、また、「子どもが壊すかもしれないと気にしなくてもいい」ということを事前に伝えた。なお、導入の結果として、「アプリの時間」での活用がA幼稚園内で望まれても、それは園の選択として是としたいと考えていたが、結果としてそのようにはならなかった。

ひとつ留意点がある。長期間の使用であるため、筆者がすべての活用場面を参観できたわけではない。取得したデータとしては、筆者による不定期の観察結果<sup>19</sup>と、それらを補足する保育者らへのインタビューである。解釈に用いたのは、これらの限定的なデータとなってしまうことを断っておきたい。

## 6. A幼稚園年長クラスでのiPad活用事例

先に知らせておくべき結論を言えば、最も積極的にiPadを活用したのは年長クラスであった。年中・年少のクラスでは、音楽プレイヤーとしての使用などにとどまっていたが、年長クラスでは、それよりも多様な活用の仕方を模索していた。本稿では、年長クラスの事例を追うことにする。

取り上げるのを年長クラスに限定しても、1年間をとおしての活用場面は、無数に挙げられる。ここでは、それらを事例としていくつかまとめて、ひとまず表1に記す。【保育者】となっているのは、主に保育者側の使用や意図に関することであり、【子ども】となってい

るのは、主に子どもの使用に関することである。所謂「自由保育」を行っていることもあり、実質のところは保育者と子どものカテゴリがかさなることもある。また、適宜、図も示す。考察は次章で行う。

表 1 2013 年度の年長クラスでの iPad 活用事例

4 月	<p>【保育者】音楽を流す際に使っていた CD を iPad に変えた(図 3)。専用プレイヤーは iPad 導入後すぐに、園で購入していた。</p> <p>【子ども】保育者が試行的に、数名に写真撮影をさせてみた。ただし、保育者は「使いづらそう」という認識をもち、継続的な活動には発展しなかった。</p>
6 月	<p>【子ども】偶然飛来し巣をつかったツバメに数名の子が関心をもち、観察記録(動画・静止画)を iPad で行い始めた(図 4)。動画も静止画も撮りたいという子どもの申し出を聞き、保育者がどちらの機能も備わっている iPad を与えた。複数の子が撮影をしたがったので、デジカメを使う子もいた。</p>
7 月	<p>【子ども】「テレビ番組」をつくらうと活動していたあるグループが、動画撮影を iPad でやりたいと保育者に申し出て、活用し始めた(図 5)。</p>
10 月	<p>【子ども】「映画」をつくらうと活動していた別のグループが、動画撮影を iPad でやりたいと保育者に申し出て、活用し始めた。ただし、使い勝手がよくなく、途中からビデオカメラも併用し始めた。</p> <p>【子ども】「写真屋」として活動していたグループが、静止画撮影を iPad でやりたいと保育者に申し出て、活用し始めた。しかし、撮影後すぐにプリントアウトしたいという希望もあり、園にはコンパクトフォトプリンターしかなかったため、それを使えるデジカメにすぐに移行した。</p>
2 月	<p>【子ども】【保育者】「博物館」として、鳥のことを熱心に調べていた子たちのために、保育者が、QR コード付きの図鑑を与えた。専用のアプリでその QR コードを読むと、様々な鳥の鳴き声が聞けるというものがある。その後、子どもたちは、他の子にもその使い方を教えるという活動を行っていった。</p>



図 3 音楽プレイヤーとしての使用



図 4 動画と静止画の撮影

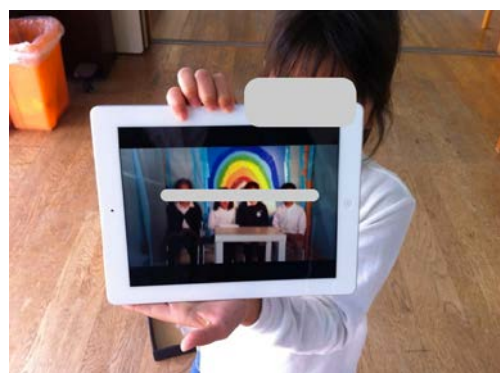


図 5 「テレビ番組」の制作

## 7. 活用事例についての解釈

前章に記した事例を補足しながら、A 幼稚園での iPad の活用のあり方について、解釈していく。

まず、4 月当初は、iPad の活用経験がある保育者がいなかったこともあってか、すぐに積極的な活用はなされなかった。筆者が行ったインタビューにて、年長の担任保育者はこのことについて次のように話した<sup>20</sup>。

せつかく(筆者注: iPad を)借りたので、どうしよっかな〜って。そうそう、どうしよっかな〜って。なんとなくどうしよっかな〜とは思ってたけど、毎日のことの方が大変で。でも何かないかな〜とは思って。たまにこう(スワイプのジェスチャーをしながら)触ったりもしてたけど。う〜ん、まあ、でも、毎日やることの方があって。でもおもしろそうだとは思ってたよ。うまく、いい感じで使えるなら使いたいなあって。

保育者の言葉のニュアンスを補足して言えば、研究として iPad を渡されたから、無理にでも、必ず、今すぐに、使おうという認識は保育者にはなかったようである<sup>21</sup>。ただし、日々の保育を営んでいく片隅で、それとなく活用のチャンスは何っていたようである。複数の保育者が、暇が許すならばそれとなく iPad を触ってい

たという。

誰かに言われるがままに活用するのではなく、保育者自身による試行錯誤の期間が許されており、その期間がその後生きてくるのは、他のメディア導入と同様であろう。事後的な理解ではあるが、A 幼稚園においては、このような保育者自身によるゆるやかな試行錯誤の時間や、それとない探求の意識が、後に生きていった。

おそらく、どちらの面も重要である。たとえば、時間的余裕はあれども、探求の意識がないのであれば、後に活用を試みることにもならなかつたであろう。A 幼稚園では、道具の使い方の探求にこだわる文化がある（阿部 2014a）。そうした素地があることも、iPad 導入の仕方には関係していたと思われる。

また、4 月当初は、年長のみならず、全学年がこれまで使っていた CD プレイヤーを iPad に変えるということを試みている。保育者らによれば、CD を入れ替える手間が省けたり、ランダム再生で思いがけない子どもの反応が見られたりと、有意義な成果が得られたとのことである（阿部 2014b）。このように、iPad を導入することによって、何かを一度に刷新しようとするのではなく、今あるものをちょっと便利にする代替物として使えるところから使っていくということも、A 幼稚園での活用においては、重要な点であったのだろう。刷新ではなく、ゆるやかな移行である。

その後、子どもたちに少しずつ iPad を活用させながら、保育者らは iPad の使い勝手を細かく認識していった。それは、大雑把に、写真が撮れる、動画が撮れる、といった認識ではなく、たとえば次のような認識である。

晴れて外で撮影するときは、iPad だと見づらいのよ。ビデオの方がいい。光っちゃって、（筆者注：子どもが撮影しても、うまくディスプレイで確認ができず）足しか写ってないとかあって。こう、下がってきちゃうのね。見えないから。子どもから、「う〜んこりゃだめだ」って。子どもの方から。だったら、ビデオじゃんって。

とっさに撮影をしたいときには、そういうのが大事なときが多いんだけど、どうしてもすぐ撮るには慣れてた方がいいってのもあって、ちょっと……（筆者注：iPad の操作にまだ時間がかかることをジェスチャーで表す）……反応が速いのは、うん、だから、デジカメの方がいいかなって。

子どもが……こういう姿勢（筆者注：固定できる姿勢）で撮影するなら（ブレないのよ）iPad がいい。

保育者は、このように場面や用途に応じて使い勝手を細かく認識していた。そして、そのことが、ある場面において他の道具ではなく iPad を道具として選択する際

の重要な基準となっていた。

保育実践においては、子どもが触れるもの、保育者が提示するものなどが、活動の展開に大きな影響を与える。保育者が新たな道具を差し出しても、その道具を子どもがうまく使えなければ、遊びは停滞してしまうかもしれない。一方、道具ひとつで遊びが盛り上がることもあるだろう。iPad も、十全な道具として取り入れるのではなく、道具としての細かな特徴を認識した上で、取捨選択の上、適宜活用されるべきなのだろう。おそらく、A 幼稚園の保育者は、他の道具についても細かく使い勝手を認識していて、それを個人の引き出しとしているはずである。するとやはり、iPad に固有の価値があるのではなく、使用者の「センスとタイミング」（新垣 2006）が重要となるということなのだろう。

他方、学習用に整備されたタブレット PC や、特定の教育アプリであれば、使う場面や用途が限定されているため、使い勝手について不満があっても受け入れるか、活用を断念するかはわからないかもしれない。

また、子どもにおいて重要なのは、iPad が「〇〇のための道具」となるかどうかということであったのだろう。iPad がただただ珍しい道具であり、だから闇雲に触りたいということであれば、もしかしたら奪い合いのケンカが起こっていたかもしれない。ところが、A 幼稚園においてはケンカは見られなかった。珍しいから触りたいという興味だけでなく、何かものをつくったり表現したりというときに、それに適した道具を使いたいという、言わば成果優位の発想をもっていた<sup>22</sup>。子どもから「う〜んこりゃだめだ」という言葉が出たとされるように、iPad が自分が目指す表現に適さない道具なのであれば、子どもの方で使わないという選択がなされていた。iPad そのもので遊ぶのではなく、何かをつくるために道具のひとつとして iPad が適しているかどうかということである。

こうした認識は、おそらくは一朝一夕で身につくものではない。日頃から、こうした発想のもと道具を使わせているかどうかということが、新しいメディアを受け入れる際にも影響するのだろう。

日々の保育実践で iPad を活用していくのであれば、子どもにおいても、iPad の道具としての細やかな使い勝手が認識される必要がある。そのためにはもしかしたら、使用時間を過度に縛るのではなく、まずは思う存分、使い倒すようにさせた方が、その道具としての認識が深まるのではないかと仮説立てることができる。これは、「アプリの時間」で重ねられる知見と異なるものだと思う。

## 8. 成果と課題

本研究では、A 幼稚園の iPad 導入期の事例を解釈し、保育実践における「アプリの時間」以外での活用方法について示唆を得ようと試みた。その試みにあたっては、条件を統制して成果をみていくような手法ではなく、活用事例をもとにして解釈していく手法をとった。

本研究におけるデータは限定的なものではあったが、次のことは示唆された。iPad の道具としての使いやすさ／使いづらさを大人も子どももできるだけ細かく認識することが、特に保育実践においては、無理なくタブレット PC を導入・活用する一歩となるのではないかとのことである。他の道具との差異を認識することも重要である。また、ゆるやかな試行錯誤の時間、それとない探求の意識、代替物としての使用などの積み重ねがひとつのモデルとなりうる。A 幼稚園での導入・活用の過程は、ゆるやかなものであった。これをもとにするのであれば、タブレット PC のことを、保育実践を刷新する魔法の道具と思わないことがまずは重要であろう。

今後の課題としては、まずは 2013 年度の事例をふまえて、より詳細な調査・分析をする必要がある。本稿の記述が実践についての大雑把な記述にとどまっていたことはいぬめない。また、本稿では仮説を導いたにすぎない。ここでの仮説をふまえ、多様な調査、継続的な観察を続けていくことが求められる。また、本研究とは異なるアプローチからの研究も、それは筆者の仕事ではないが、同時になされていくことで、より様々なことが明らかになるだろう。

さらに、導入期である 2013 年度を経た、2014 年度以降の保育者の認識や技能の変容を追う必要がある。導入期の活用を経て、保育者らに使用したいアプリの候補が挙がっていたり、こんなことはできないかという構想がなされていたりする。またすでに、実践の場以外でも、ドキュメンテーション作成のために活用されるということが行われ始めている。今後、より積極的な活用がみられるだろう。

すると、iPad の活用の仕方をサポートする者の存在があるとよいかもしれない。日々の業務に追われる保育者らだけでは、どうしても試行錯誤の限界がある。A 幼稚園の実践の特徴を認識しながら、A 幼稚園に継続してかかわることができる者で、できれば iPad に詳しいという者がいれば、新たな展開が起るかもしれない。

最後に、より遠くを見据えた課題を付す。保育実践においてあたりまえに使われている道具の存在について、改めてその意義を問うてみたい。新しいメディアたるタブレット PC をどういう道具として認識するかは、その園が他のさまざまな道具を普段どのように認識しているかということを示しうるのでないか。タブレット PC の活用の仕方は、その園なりの道具の使用に関する考え方をあらわにするのではないかとのことである。

ひいて言えば、その園の保育に対する理念があらわれてくるはずである。一般に、自らの園の文化を自ら振り返ることは難しい。新しいメディアの導入期に注目し、そこで自分たちの認識を省察することによって、普段は見えづらくなっていることが見えてくるのではないか。

<sup>1</sup> たとえば、次のウェブサイトを参照。

日本経済新聞「小 1 へのプログラミング教育、佐賀県武雄市が成果報告」

<http://www.nikkei.com/article/DGXMZO83141860T10C15A2000000/> (2015 年 2 月 20 日閲覧)

<sup>2</sup> 日本の保育実践の多様性については、Holloway (2000) を参考にした。

<sup>3</sup> たとえば、現行の幼稚園教育要領 (第 1 章・総則、第 1・幼稚園教育の基本) では、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」ことを重視すべきと記されている。

<sup>4</sup> 幼児期に遊び・生活より学習を重視すべきという考えもありうるが、昨今の保育研究においては、前者を大切にすべきという考えが一般的であると思われる。

<sup>5</sup> タブレット PC とスマートフォンは異なるものであるが、類似点も多いため、ここでは同列に扱う。

<sup>6</sup> 本稿で iPad を導入する幼稚園でもある。

<sup>7</sup> この園では、基本的には、子どもたちが各々つくりたいものをつかっていくという仕方である。保育者が営まれている。保育者によれば、この携帯電話も子どもたちがつくりたいと言いつつ出たことである。A 幼稚園の実践については、阿部 (2014a) に詳しい。

<sup>8</sup> 株式会社スマートエデュケーション ウェブサイト

<http://www.smarteducation.jp/> (2015 年 2 月 20 日閲覧)

<sup>9</sup> 聖愛幼稚園園長・野口哲也氏へのインタビュー

[http://www.smarteducation.jp/interview\\_noguchi.html](http://www.smarteducation.jp/interview_noguchi.html) (2015 年 2 月 20 日閲覧)

<sup>10</sup> コビープリスクールよしかわ園長・三鍋明人氏へのインタビュー

[http://www.smarteducation.jp/interview\\_minabe.html](http://www.smarteducation.jp/interview_minabe.html) (2015 年 2 月 20 日閲覧)

<sup>11</sup> 正しくは、「iPad mini」である。原文ママ。

<sup>12</sup> 鍵括弧の重複は原文ママ。

<sup>13</sup> コビープリスクールよしかわでの活用事例レポート

[http://www.smarteducation.jp/casestudy\\_yoshikawa.html](http://www.smarteducation.jp/casestudy_yoshikawa.html) (2015 年 2 月 20 日閲覧)

<sup>14</sup> 前掲、野口哲也氏へのインタビュー

<sup>15</sup> 前掲、三鍋明人氏へのインタビュー

<sup>16</sup> A 幼稚園は、アートやデザインのちからをかりつつ、所謂「自由保育」の理念のもと、独自の実践を重ねてきている。A 幼稚園の実践そのものの構造については、阿部 (2014a) に詳しい。

<sup>17</sup> 千葉大学教育学部授業実践開発研究室 (藤川大祐研究室) が管理している iPad を使用した。5 台という台数にしたのは、使用できる台数に実質的に制限があったからではあるが、ひとまずは 1 クラスに 1 台以上あればいいと考えた。なお、A 幼稚園には、基本的には年少・年中・年長の 3 学年があり、各学年は 2 クラスずつである。ただし、クラスや学年の枠をこえて活動することはとても多い。iPad の機種は、iPad2 である。

<sup>18</sup> iPad の使用に関連する園の環境等について補足しておく。2013 年度、Wi-Fi は、職員が作業をする場所である「事務所」内で活用できるものはあったが、各保育室までは届いていなかった。ただし、2014 年度に入り、各保育室まで届くものに変更された。iPad の充電は、当初は事務所内で行われていたが、各保育室での活用が始まると、保育室内での充電となった。カバーは、市販の表面、裏面ともに覆うことができるものを使用していたが、特に理由なくはずしていることもあった。また、音楽プレイヤーとして活用する iPad には、保育室の壁に吊り

下げられるようなカバー（園で購入）を付けていた。図3の写真に示されている。

<sup>19</sup> 年間をとおして、2週間に1~2回程度の参観を基本としたが、筆者の個人的な都合により9月と12月は1度も参観できていない。

<sup>20</sup> 筆者による半構造化インタビューの一部である。インタビューは録音した。本稿の記述は、それを文字起こしたものである。本稿で取り上げたインタビューは、年度末の、子どもたちが卒園して業務が一段落したあたりに実施したものである。本稿中のインタビューに関しては、すべて同じ条件のものである。

<sup>21</sup> 筆者は数年前からA幼稚園にかよっており、ある程度の関係が築けていたことが背景にあると考えられる。

<sup>22</sup> 「成果優位」といっても、A幼稚園がプロの芸術家を育成するという理念をもっているという意味ではない（阿部2014a）。作品について、みなが到達すべき一律の基準があるわけでもない。見栄えのよい作品をつくるための技法を教えこむこともない。むしろ、個々の子どもの活動の過程こそ重視される。だからこそ、長期的な活動を行っているとも考えられる。そして、ここで示唆的なのは、成果でなく過程を重視するためには、逆説的に、成果にこだわるのが重要になるのではないかということである。成果優位という言葉には、誤解の可能性もあるが、この二重の意味を理解することは、保育実践を解していく上で重要であると思われる。

#### 引用文献

阿部学（2014a）「ある「自由保育」実践のエスノグラフィー—〈リアリティーファンタジー〉構造の再検討—」千葉大学大学院人文社会科学部研究科博士学位論文

阿部学（2014b）「新しいメディア」としてのスマホ・タブレット—どう向き合うか?—日本保育学会会報、第158号、p.5

新垣理佳（2006）「幼児教育における「仕事」の時間のカリキュラム開発—芸術表現活動と経済活動に重点をおいたカリキュラム」、千葉大学大学院教育学研究科カリキュラム開発専攻修士論文

大豆生田啓友（2014）『「子ども主体の協同的な学び」が生まれる保育』学研教育みらい

株式会社スマートエデュケーション ウェブサイト  
<http://www.smarteducation.jp/>（2014年7月7日閲覧）

小林紀子（2006）『メディア時代の子どもと保育—求められる遊び経験と保育者の専門性—』フレーベル館

中坪史典（2005）『コンピュータを利用した保育実践に関するエスノグラフィー研究』北大路書房

ベネッセ教育総合研究所（2013）「乳幼児の親子のメディア活用調査 報告書」  
<http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4105>（2015年2月20日閲覧）

堀田博史（2007）『幼児とメディア』学習研究社

Holloway, S. D.（2000）Contested Childhood: Diversity and Change in Japanese Preschools, London: Routledge.（高橋登・南雅彦・砂上史子訳（2004）『ヨウチエン—日本の幼児教育、その多様性と変化—』北大路書房）

#### 付記

本稿は次の発表内容に大幅に加筆したものである。

阿部学（2014）「ある幼稚園における保育実践へのタブレットPC導入期の記録—「アプリの時間」以外での活用—」日本教育工学会第30回全国大会（岐阜大学）、pp.881-882

#### 謝辞

本研究は、千葉大学大学院人文社会科学部研究プロジェクト「自由保育幼稚園におけるタブレットPC導入のエスノグラフィー」（2013年度）として支援をうけ実施しました。A幼稚園においては先生方のご協力のもとスムーズに観察とインタビューを行うことができました。子どもたちはiPadを様々に活用してくれました。皆様に、感謝申し上げます。

に活用してくれました。皆様に、感謝申し上げます。